様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　6 月　25 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21653074
研究課題名（和文）　ナラティブと対話的自己を取り入れた難病患者ライフのぶ厚い記述
-厚生心理学の提唱
研究課題名（英文）　Thick description of the life of intractable diseases using narrative methods

研究代表者
佐藤　達哉（SATO TATSUYA）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90215806

研究成果の概要（和文）：
難治性疾患を得た人や、症状が悪化していく病気に罹患した人の人生は患者として医師との関係でのみ扱われればいいのだろうか？こうした疑問をもとに、「人生 with 病い」という考え方を基盤におき、病を得た人の生き様を描く手法を開発し、その人生を支えつつ理解しそしてその QOL を高める努力を行う研究学範(ディシプリン)としての「厚生心理学」を提唱するのが本研究の目的である。具体的には SEIQOL(the Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life)と TEM(Trajectory Equifinality Model)という方法論の開発を行い実践研究を行った。SEIQOL によって身体状況や疾病状況の悪化を直ちに QOL 低下として理解してはいけないこと、TEM によって患者の治療などの具体的選択を描く際に様々な力のせめぎ合いを描くことやそれまでの径路のあり方を描くこと、そして実現しえなかった径路を描くことが重要であることを示した。また、『厚生心理学』と銘打った冊子を刊行して、本研究の基本的考えを世に問うた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to psychology for treating the life of Nambyo (intractable diseases) patients. Many instruments used to measure Health Related QOL focus narrowly on physical functioning and disregard the well-being of patients. I use the qualitative and rather new methodology for treating the patients' lives. These are SEIQOL (the Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life) and TEM (Trajectory Equifinality Model). In empirical study, SEIQOL was conducted for describing a patient's QOL-related experiences for three years. This longitudinal survey reveals the maintenance and transformation of patient's QOL instead of patient's deterioration of disease. In theoretical part, TEM's basic methodological tools were invented and the model of psychological self which is called "mountain range selves" was proposed. A possibility of a new sub discipline of psychology concerned with the lives of Nambyo (intractable diseases) patients has been established by this study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	0	800,000
２０１０年度	1,100,000	0	1,100,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	300,000	3,200,000

研究分野：　心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：ナラティブ,QOL,SEIQOL, TEM, 医療心理学, 難病, 質的研究

１．研究開始当初の背景

本研究は「挑戦的萌芽研究」として、難病や慢性病患者の生活に寄り添う心理学を構想する。即ち本研究では関係論的、複線径路的な視点から、病を得るまで・得てからの物語（人生物語)、現在における葛藤・苦悩や喜び（QOL)、未来へ展望（時間的展望）についてぶ厚く丁寧に記述するため、QOL 評価法である SEIQOL(the Schedule for the Evaluation of Individual Quality of Life)と TEM(Trajectory Equifinality Model)を中心に研究と提案を行っていく。
これらの方法論のうち前者はアイルランドで開発されたものであり、WHO によって QOL の重要な尺度であると指摘されているにもかかわらず日本では浸透していない。その理由は医学において単なる測定尺度として用いられていることに一因がある。SEIQOL は個人的な QOL の把握を行うツールであるが、その背景にある社会構成主義的な考えを取り込まなければ、実際的な発展が見込めない。方法論のうちの後者は研究代表者が中心になって開発してきた日本発の質的研究法である。この手法は時間を捨象せずに、人生の径路を様々な分岐点における対話的自己のあり方によって記述する質的な研究手法であり、難病患者の生活を記述するために重要なツールとなることが期待された。
さて、難病患者の生活に焦点をあてるような本研究が関係する分野は、これまでは自動的に臨床心理学や健康心理学の一部であると考えられてきたが、本研究ではこれらの分野の蓄積に加え、文化心理学や質的研究の発想をもとに行うことになる。そこで従来の臨床心理学は健康心理学、ひいては医療心理学と一線を画す意味で厚生心理学という名称も提案することにしたい。つまり、この挑戦的萌芽研究は一つの考え方を提唱するという意味において挑戦的なのである。

２．研究の目的

以上の背景をもとに、今回の研究ではまず、QOL について理論的に考察し、それをこれまでと異なる方法で捉えることを目指す。
SEIQOL については、背景にある哲学的な思想の理解を行いつつ、SEIQOL を筋ジストロフィー患者に継続的に施行することで方法論を確立し、また難病患者の病状が悪化し身体能力が悪化したとしても QOL が自動的に低下しないようなツールを開発する。
TEM については、「人生 with 病い」という状況における径路について時間を捨象せずに描くことはもちろんのこと、選択肢の可視化が QOL と直結するということを理論的に明らかにし、また、様々な概念ツールを整備することを目指す。

３．研究の方法

本研究は実践的研究と理論的研究から成り、それぞれにふさわしい方法で研究を展開する。
ある病院で神経難病患者の QOL とナラティブに関する調査を行うとともに、QOL 及び質的研究に関する理論的な検討をすすめていく。さらに本研究の考え方や方法論を普及させるために、アメリカ・Valsiner 教授（クラーク大学)、Bamberg 教授(クラーク大学）、McAdams 教授（ノース・ウェスタン大学)、Gergen 教授（スワスモア大学)、オランダ Hermans 名誉教授(ラドボウド大学)、イタリア・Salvatore 教授(レッチェ大学)、ブラジル・Ana Cecilia 教授（バイア大学）などと連携をとり、方法論の国際化を進めると共に、普遍的方法論として整備していく。

４．研究成果

『厚生心理学』という名称を冠した著書を刊行できたことが何よりの成果である。病いを直すことを主たる目標にするのではなく、病いと共にある人生を「人生 with 病い」と概念化した上でそのぶ厚い記述を質的に行う研究・実践領域を提案することができたため挑戦的萌芽研究にふさわしい成果である。
　QOL の理論的研究においては、経済効果に QOL を回収するような方法（QALY）について理論的に批判を行い、生活そのものを記述するツールが必要であると結論した。
　病いと共にある人生を記述するための方法論である SEIQOL と TEM についても、概念的方法的な検討を行った（サトウ、2010)。
　また、直接的な成果ではないが、2012 年１月にイタリア・サレルノ大学、同３月にブラジル・バイア大学からそれぞれ講演・講習の依頼があり、国際交流を兼ねた成果の公表を実施した。日本発の心理学的な質的研究法が世界に受け入れられ始めている証左であろう。日本質的心理学会第８回大会(2011 年 11 月)において TEM に関する講習会を行ったことも付記する。
　方法論的な意味での成果は二つある。SEIQOL に関してと TEM に関してに分けて記述する。
　SEIQOL は、QOL の項目を予め設定して患者に尋ねるのではなく、患者本人がどのような

事柄を自身のQOLにとって重視するかを訪ねる方法である（自身が重視する項目を５つ挙げてもらう）。本研究では、ある病院において同一人物に対して２年余にわたって６回繰り返して SEIQOL を施行した。こうした研究は日本では珍しい。このような手法を用いることによって、身体機能の悪化が必ずしも本人のQOLの悪化をもたらさない可能性を捉えることが可能になることが確認できた（福田・サトウ、2012）。

TEMは、個人の経験を過去からの歴史の文脈に置いてとらえるものであり、しかも、現実に実現した径路と可能ではあったが実現しなかった径路を共に可視化して個人の人生を考える方法論である。時間を外在的に存在するものとして考えるのではなく、個人の変容と共にあるものとして時間を捉えることの重要性について理論的な展開を行った（サトウ、2011）。これにより、発達を狭い意味に捉える心理学の制約から逃れることができ、病いを得た人の経験の変容を正当に扱うことが可能になると考えられた。さらに本研究では、個人が人生径路において何故ある選択を行い何故ほかの選択をしなかったのか、ということについて描くための概念ツールの整備を行った。特に、自己を三層構造として捉える発生の三層モデルや、唯一の自己を想定するのではなく山脈のような自己群を想定する山脈的自己の理論を構築したことによって、先の SEIQOL における重要項目の設定との関連を構想することができるようになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①日高友郎・水月昭道・サトウタツヤ 2012/03/20 神経難病患者の生を捉えるライフ・エスノグラフィ―在宅療養の場の厚い記述から.質的心理学研究, 11, 96-114,査読有

②福田茉莉・サトウタツヤ 2012/03/20 神経筋難病患者の Individual QOL の変容：項目自己生成型QOL評価法であるSEIQOL-DWを用いて,質的心理学研究, 11,81-95,査読有,

③赤阪麻由・日高友郎・サトウタツヤ 2011/12/15 「「見えない障害」とともに生きる当事者の講演による高校生の障害観の変容」, 『立命館人間科学研究』, 24, 49-62, 査読有

④サトウタツヤ 2010/03/20 「QOL、再考（死より悪い QOL 値を補助線として）」 立命館大学生存学研究センター【編】 生存学, vol.2, Pp.171-191, 査読無,

⑤福田 茉莉・サトウタツヤ 2009/08/25 「SEIQoL-DWの有用性と課題――G. A. Kellyのパーソナル・コンストラクト・セオリーを参照して」,『立命館人間科学研究』,19, 133-140,査読有

〔学会発表〕（計１０件）

① Fukuda, M. and Sato, T. 2012/2/5 "Individual Quality of Life in person with Duchenne Muscular Dystrophy: the transformations of QOL over time" The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012 (University of Tokyo, Japan)

②Hidaka, T., Mizuki, S., Fukuda, M., Akasaka, M., and Sato, T. 2012/2/5 "HOW ALS PATIENTS EXPERIENCE AND MAKE SENSE THE LIFE WITH ILLNESS", The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012 (University of Tokyo, Japan)

③Sato, T. 2012/2/5 "THE NARRATIVE PATHWAY TO AUTHENTIC CULTURE OF LIVING WELL", The 7th International Conference on Rare diseases & Orphan Drugs 2012 (University of Tokyo, Japan).

④サトウタツヤ・安田裕子・佐藤紀代子・荒川 歩 2011/11/26 「インタビューからトランスビューへ：TEM の理念に基づく方法論の提案」 日本質的心理学会第８回大会ポスター発表,安田女子大学(広島県)

⑤サトウタツヤ 2011/09/24 「QOL 測定の仕組み。特に難治性疾患における新しい QOL に注目して」 シンポジウム 緩和医療における QOL 評価とは何か？ 第５回日本緩和医療薬学会年会,幕張メッセ(千葉県)

⑥Sato, Tatsuya 2011/07/06 The Real Futures of sign and promoter sign; What Trajectory Equifinality Model (TEM) implies for cultural psychology In Symposium New ways with(in) cultural psychology (Gulerce, Aydan orginizer). 12th European Congress of Psychology, Istanbul,Turkey.

⑦Mari Fukuda & Tatsuya Sato 2010 Quality of Life In Persons with Muscular Dystrophy: the Example of Constructs of Individual QoL. The 6th International Conference on the Dialogical Self, 30th 2

⑧サトウタツヤ・日高 友郎・水月 昭道 2009/09/13 「文化心理学の方法論を厚生心理学という発想へ－TEM/HSS/TLMG:あるいはオープンシステム・プロセス・ジェネシスの記述のための方法論」,『日本質的心理学会第６回大会抄録集』,北海学園大学(北海道) 010/09/30, Athens in Greece.

⑨福田 茉莉・サトウタツヤ・中島 孝・長谷川 芳典 2009/09/13 「SEIQoL から捉えた

個人の QOL(4)――大学生を対象としたSEIQoL-JA の方法論的検討」,『日本質的心理学会 第6回大会抄録集』p.85,北海学園大学(北海道)
⑩日高 友郎・サトウタツヤ 2009/10/10・11 「ALS サイエンスカフェの場の分析」,日本社会心理学会 第50回大会・日本グループダイナミクス学会 第 56 回大会合同大会,p.110,大阪大学(大阪府)

〔図書〕(計７件)
①サトウタツヤ 2012/03/26 『学融とモード論の心理学』 新曜社 全320頁
②日高友郎・滑田明暢・サトウタツヤ編 2011/09/13 「 厚生心理学と質的研究法－当事者(性)と向き合う心理学を目指して－」共同対人援助モデル研究 2 立命館大学人間科学研究所 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「大学を模擬社会空間とした持続的対人援助モデルの構築」全122ページ
③サトウタツヤ・渡邊芳之 2011/04/10『心理学・入門』 有斐閣 序章 pp.1-20、１章 pp.21-46、４章 pp.91-126、８章 pp.193-210、９章 第２，３節 pp.220-234
④サトウタツヤ 2011/03/30 『方法としての心理学史――心理学を語り直す』,新曜社,224p
⑤サトウタツヤ 2011/03/25 「心の発達と歴史」 日本発達心理学会 編／子安増生・白井利明 責任編集 『時間と人間―発達科学ハンドブック３』、新曜社 第２章 Pp.34-48.
⑥ Sato,T., Wakabayashi,K. ,Nameda,A., Yasuda,Y., & Watanabe,Y. 2010/08/15. Understanding a Personality as a Whole. in Toomera,A., & Valsiner,J.(Eds.) Methodological Thinking in Psychology: 60 Years Gone Astray? Charlotte, N.C.: InfoAge Publications, pp 89-119.
⑦ Tatsuya Sato, Tomo Hidaka and Mari Fukuda 2009/07/01 "Depicting the Dynamics of Living the Life: The Trajectory Equifinality Model". In Valsiner, J.; Molenaar, P.C.M.; Lyra, M.C.D.P.; Chaudhary, N. (Eds.) "Dynamic Process Methodology in the Social and Developmental Sciences" Springer, pp.217-240.

〔その他〕
①日本学術振興会 研究成果の社会還元・普及事業 ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ＫＡＫＥＮＨＩ小中高校生のためのプログラム

この企画は３年間にわたって行い、難病(ALS)患者であるＨ氏に協力を依頼して難病と共に生きることや生きやすい技術の工夫について小中学生と共に考えた。

②サトウタツヤ 2009/09/21 さまざまな困難をのりこえるための家族・仲間の大切さ――患者さんから学ぶ 於・立命館大学
③サトウタツヤ 2010/07/25『病いとともに生きる』という生き方―生きることの楽しさを難病の患者さんから学ぶ 於・立命館大学 http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht22000/ht22143.pdf
④サトウタツヤ 2011/08/04 人生 with 病い 於・立命館大学

ホームページ等
「SEIQoL について」 http://www.arsvi.com/2000/0911st4.htm
「QALY について」 http://www.arsvi.com/2000/0911st.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤 達哉 (SATO TATSUYA)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90215806